

〈論文〉

明治時代の横浜の言語景観

早坂直記

キーワード：言語表記，絵葉書，横浜居留地，外国人

1. はじめに

横浜市のホームページには、「いろんな人，モノが出会い，交差する場所」として，スローガンを掲げ，国際都市を謳っている。その言葉が示す通り，2002年のサッカーワールドカップをはじめ，2009年の開港150周年祭，そして今年2010年のAPEC開催など，様々な国際的行事が行われている。

横浜は，開港してから発展した地域であり，歴史的にはまだ日が浅い。開港してからは，外国人居留地が作られ，日本語と外国語が併用されていた特殊な地域と言える。そこで，本論では，当時の看板表記を調べ，どのような言語表記がされていたのかを調査した。その結果，明治期の横浜では，居住制度によって使用言語が異なっていた。また，現代とは異なり，装飾的な外国語表記ではなく，実用的な外国語表記が多いこともわかった。

2. 先行研究

日本で初めて言語景観を調査したのが，正井（1969）である。正井（1969）では，新宿の言語景観を調査している。設営物（看板）を対象に調査を行った結果，1960年代の新宿は，漢字が圧倒的に使用されているものの，ローマ字の使用頻度が伸びてきたことを指摘している。そして，それは，欧米化しているのではなく，アトラクションとして使用していることを意味する，と述べている。

今回対象とする明治期の特徴を挙げているものとして，井上（2009）が挙げられる。井上（2009）では，幕末開国以降，開港地・外国人居留地には実用としての外国語（主に英語）のアルファベット表記が行われていたと述べている。また，文明開化の風潮で，漢字看板が多くなり，ひらがな・カタカナも多く使われ，まれにアルファベット表記も登場することを指摘している。

また、現代の横浜を調査したものとして、山下（2010）がある。山下（2010）では、外国人集住都市の言語景観を言語表示サービスから調査している。その結果、どの地域もモノリンガル表示が高い割合を示すことを明らかにしている。また、アルファベット表記がされていたとしても、各コミュニティでの言語表示であり、日本人には通じない情報であることを述べている。

3. 研究目的

本研究の目的は、明治期の横浜の言語景観の実態を明らかにすることである。当時の状況を明らかにすることにより、明治期の言語表記の詳細がわかる。また、それを元に、各年代とも比較をすることができる。

4. 言語景観の定義

バックハウス（2005）は、言語景観を「道路標識、広告看板、地名表示、店名表示、官庁の標識などに含まれる可視的な言語の総体」と定義している。しかし、幅が広く、様々な方法で調査がされており、決まった方法が取られていないのが現状である。そこで、本研究では、調査対象を絵葉書が掲載されている本とし、その中で識別可能な文字を言語景観として定義することにする。

5. 研究方法

5.1 調査対象

明治期の横浜絵葉書が掲載されている以下の本を対象とする。

『ペドラー・コレクション 横浜絵葉書』ニール・ペドラー編（1980）有隣堂

『横浜絵葉書』半澤正時（1989）有隣堂

『100年前の港町風景 横浜アーカイブス』林宏樹・服部一景（2006）生活情報センター

『100年前の横浜・神奈川 絵葉書で見る風景』横浜開港資料館編（1999）有隣堂

以上、4冊である。この4冊を取り上げた理由は、明治期の絵葉書の代表作が載っているからである。横浜絵葉書はまとまって残っていることが少なく、現在も確認できていないものも多い。そのような中で、まとまったデータとして集められているので、これら4冊を対象にした。

4冊全てに異なる情報が載っているのではなく、共通して載っている絵葉書も複数ある。その場合は、4枚を1つの資料として考える。

5.2 絵葉書について

日本の絵葉書誕生について述べているものに、桜井（2010）がある。桜井（2010）では、数種類の文献を引用し、絵葉書の起源を明らかにしている。一般的には、明治33（1900）年に私製絵葉書の発行が許可されてから、絵葉書が広く普及したということだが、外国（人）向けの絵葉書はそれ以前からあったということを述べている。

絵葉書とあるが、今回対象にしているものは、実際に葉書に絵を描いていたのではなく、コロタイプという写真製版・印刷技術を活用した、実際の風景、風俗が写っているものである。

5.3 横浜居留地について

対象とする横浜居留地は、安政5（1858）年に結ばれた通商条約によって、造られることになった居留地の1つである。横浜の他にも、長崎・函館・神戸・新潟が開港し、居留地が造られることになったが、その中でも横浜は約44万坪（133ヘクタール）と最大規模の大きさであった。慶応2（1866）年10月20日に火災が起り、壊滅的な打撃を受ける。その後、再建されるが、それをきっかけに、住宅地の山手、商工業地区の居留地といった区別がされるようになる。

安政6（1859）年6月2日に開港してから、明治32（1899）年の条約によって廃止されるまで約40年間、居留地制度は続いた。

6. 調査方法

調査資料を参考に、地域・表記法・文字種・言語種を確認していく。

6.1 地域

横浜の関内周辺を中心に取り上げる。その理由として、明治期の関内は外国人居留地に指定されており、当時の横浜を代表する場所であったからである。その関内周辺を「日本人居住区・外国人居留地・関外」と3地域に分ける。

この分類の仕方については、2通りの理由がある。1つは、明治期の居住制度である。当時、関内を半分に区切り、半分を日本人居住区、残り半分を外国人居留地としていた。そして、関内の外を「関外」とし、区別を行っていたことによるもの。もう1つは、調査資料である、4冊の本の記載によるものである。

6.2 表記法

当時の表記法は、外国語の影響から様々な方法が取られていた。そこで本研究では、以下の表のように分類を行う。

※今回は①'①"などは、数が少ないため、①として扱うこととする。

表1 表記法と表記例

①	縦	①	②	③	①'	①''
②	右横	明海	IAKIEM	MEIKAI	MEIKAI	MEIKAI
③	左横					
④	縦+右横					
⑤	縦+左横					
⑥	横+横					
⑦	縦+横+横					

6.3 文字種

文字種を、漢字、ひらがな、カタカナ、アルファベットの4種類に分類した。

表2 文字種と文字種例

① 近江屋	① 漢字	⑨ ひ+ア
② つちや	② ひらがな	⑩ カ+ア
③ ハカリモノサシ	③ カタカナ	⑪ 漢+ひ+カ
④ THE CLUB HOTEL	④ アルファベット	⑫ 漢+ひ+ア
⑤ しゃも料理	⑤ 漢+ひ	⑬ 漢+カ+ア
⑥ エビス生ビール	⑥ 漢+カ	⑭ ひ+カ+ア
⑦ WATCH MAKER 野田時計商	⑦ 漢+ア	⑮ 漢+ひ+カ+ア
⑨ TOBACCOS たばこ	⑧ ひ+カ	
⑩ TOKYO BEER ビール		
⑪ しゃも 牛 キリンビール		
⑬ TONBOYA エハガキ問屋		
※⑧・⑫・⑭・⑮は、該当例なし		

6.4 言語種

言語種を、日本語、英語、中国語に分類した。漢字表記については、明らかに中国語だと思われる料理店名（聘珍楼や金陵）は、中国語として扱った。

表3 言語種

日本語
英語
中国語
日+英
日+中
日+英+中

7. 調査結果

7.1 絵葉書枚数

絵葉書は全部で324枚あった。絵葉書で確認できる文字の有無を図1で示した。

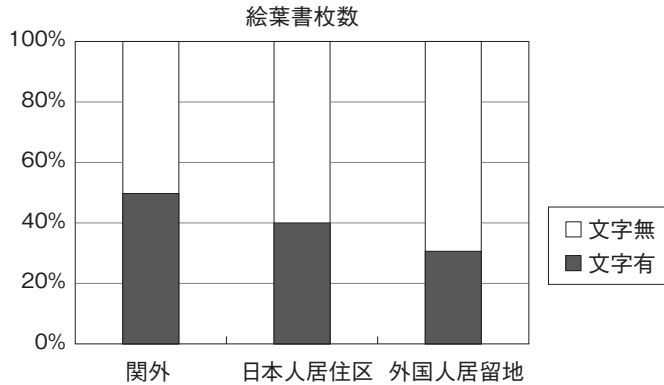


図1 絵葉書枚数

関外・日本人居住区・外国人居留地の順に文字無しの葉書が増えていく。文字無しの葉書が増える理由として、地理的要因が挙げられる。外国人居留地などは海に面しており、絵葉書も海を対象としているものが多いため、文字無しが多くなる。

葉書枚数は、324枚であるが、1枚につき1つの看板という訳ではなく、複数看板が写っている葉書もある。それらを合計すると、文字件数は456件である。内訳は、関外176件、外国人居留地154件、日本人居住区115件である。

7.2 表記法・文字種・言語種

次に、それぞれの割合を見ていく。表記法の割合を図2に示す。関外では、縦や右横始まりが多いのに対し、日本人居住区や外国人居留地になると、左横始まりの割合が増える。これは、関内地域が外国人街になっていたことを表わしている。

文字種の割合を図3に示す。関外が漢字や漢字+ひらがなが多いのに対し、日本人居住地や外国人居留地ではアルファベットが多い。これは、表記法とも対応していて、アルファベット=左横書きということが言える。

言語種の割合を図4に示す。文字種で見たように、漢字の多い関外は、日本語が一番多くなっている。逆に、アルファベット表記の多かった外国人居留地は、英語の割合が高くなっている。中間地点である日本人居住区は、日本語が多いが、日本語+英語という折衷形式が他の地域に比べ多い。

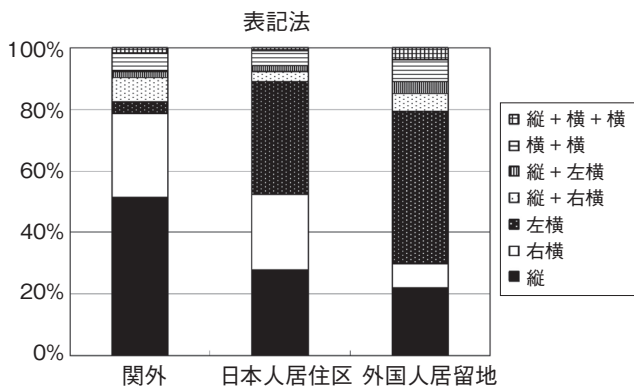


図2 表記法割合

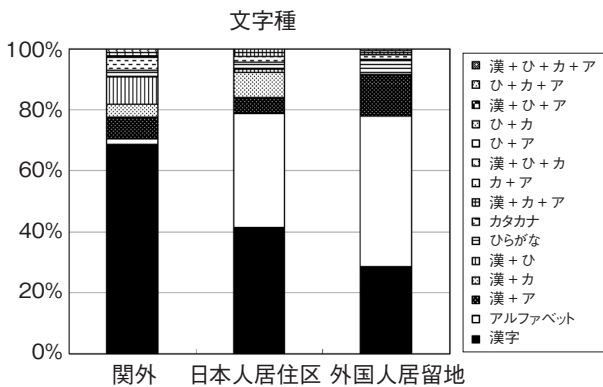


図3 文字種割合

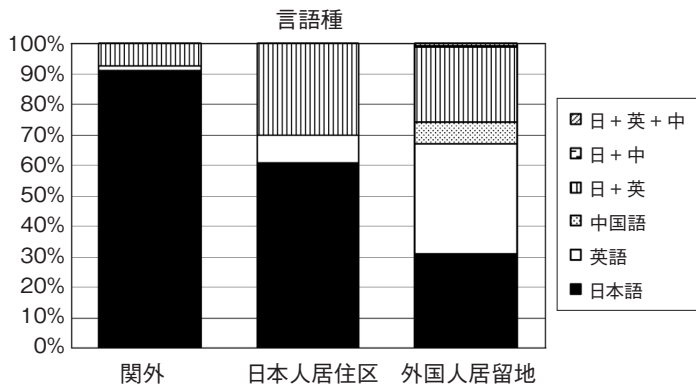


図4 言語種割合

7.3 コレスポネンス分析における結果

ここまで、2つの視点から割合を見てきたが、多方向から分析するために、統計ソフトSPSSを使用したコレスポネンス分析を行った。その結果を図5で示す。

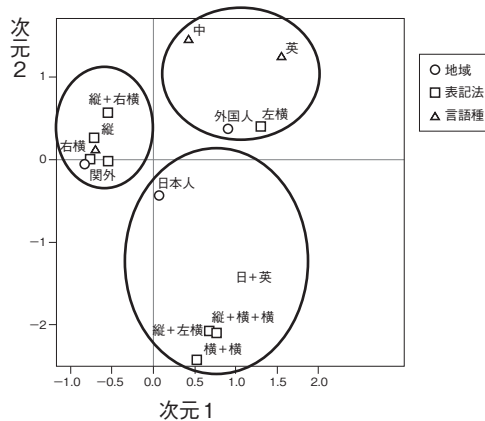


図5 地域と表記法と言語種

このグラフは、それぞれ近いものが、相関関係が強い。外国人居留地は、左横書きが多く、英語と中国語が使用されている。関外は、日本語が多く、縦書きや右横書きが使用されている。日本人居住区は、日本語+英語や縦書き+左横書きなど、どちらにも対応している中間地点だということがわかる。

本研究では、明治期における言語景観を明らかにしてきた。その結果、地域によって、明らかな差が出ることを証明できた。左横書き・アルファベット表記の外国人居留地、縦書きや右横書き・漢字表記の関外、どちらにも属さない中間地点の日本人居住区ということがわかった。

今後は、この結果を踏まえ、明治とそれ以外（大正・昭和・現在）を比較し、どのような変遷をしているのかを調べる。その際、調査方法は、大正や昭和は、絵葉書や同じ場所で撮影された写真を比較する。現在は絵葉書にある風景と同じ場所で写真を撮影、絵葉書と写真を比較する。その際、今回は明らかにすることのできなかつた業種を含めて、比較していきたい。

それらを調べ、言語の変遷を明らかにすると共に、横浜は本当に「国際都市」と言えるのかどうかを明らかにする。また、他の開港地との比較や中華街の比較などにも発展していきたい。

謝 辞

本稿執筆にあたり、指導して下さった山下暁美先生、助言をいただいた井上史雄先生に、この場を借りて、深く御礼申し上げます。

参考文献・参考資料

- 井上史雄 (2009)「経済言語学からみた言語景観—過去と現在」庄司博史, P・バックハウス, F・クルマス編『日本の言語景観』三元社, pp.53~78
- 桜井隆 (2010)「方言絵葉書について」『明海大学大学院応用言語学研究』No.12, pp.107~123
- 正井泰夫 (1969)「言語別・文字別にみた新宿における諸設営物の名称と看板広告」『史苑』29-2, pp.166~177
- ペート・バックハウス (2005)「日本の多言語景観」真田信治・庄司博史 (編)『事典：日本の多言語社会』岩波書店, pp.53~56
- 山下暁美 (2010)「外国人集住都市の言語景観-言語表示サービスの現状-」『明海大学外国語学部論集』第22集, pp.17~34
- ニール・ペドラー編 (1980)『ペドラー・コレクション 横浜絵葉書』有隣堂
- 半澤正時 (1989)『横浜絵葉書』有隣堂
- 林宏樹・服部一景 (2006)『100年前の港町風景 横浜アーカイブス』生活情報センター
- 横浜開港資料館編 (1999)『100年前の横浜・神奈川 絵葉書で見る風景』有隣堂
- 横浜開港資料館 (<http://www.kaikou.city.yokohama.jp/document/picture/index.html>)
(2010/09/24 アクセス)
- 横浜市ホームページ (<http://www.city.yokohama.lg.jp/front/welcome.html>)
(2010/10/20 アクセス)